

パレスチナ写真展Ⅲ

—殺し続けるな!—

2月25日(水) 12:00~18:00

26日(木) 10:00~18:00

入場無料

寝屋川アルカスホール1階ギャラリー(寝屋川市駅東へ3分)

テントの外で木切れに火をつけ暖を取るガザ南部避難民家族 イスラエル軍により追い出されようとしているヨルダン川西岸地区住民



昨年10月のガザ停戦の後も続くイスラエルの攻撃で「100日間で100人以上の子どもが殺され」(ユニセフ発表)、餓死・凍死する人も続出しています。「国境なき医師団」の医療活動さえもイスラエルは拒否しているのです。今も続くイスラエルの虐殺。誰がこの虐殺を支えているのでしょうか? 世界の軍事企業にまじって、パレスチナの人を殺すイスラエル軍戦闘機の部品を輸出したり、弾薬製造に使われる産業用ロボットを輸出する日本企業にも責任があります。

今回は、それらにも焦点を当てて、展示します。ぜひご参加ください。

*私たちは、

- ガザ停戦を守れ!と呼びかけています
- イスラエルへの経済制裁や、AFZ(アパルトヘイト・フリーゾーン)と呼びかけています
- 日本政府のパレスチナ国家承認を求めています
- 2/22(日)10:00 写真展実行委員会(下記事務所) 写真展を手伝ってくれるスタッフを募集中です
- 3/12(木)予定 関西BDS行動 イスラエルの攻撃を支援する企業に対して、「加担するな」と要請に行きます



イラク・アフガンの女性を支援する会

連絡先: 寝屋川市早子町 20-12 寝屋川 平和と市民自治の会事務所 090-3927-6382

●昨年 11 月 15 日に、パレスチナ・ヨルダン川西岸地区でイスラエルの武力侵攻に抗議し、闘っているモハメド・アローシュさんが来日されました。西岸地区でも、武器を持ったイスラエル人入植者が威嚇し、抵抗する人を射殺しながら占領地を拡大しています。生活する手段も奪われながらも、新たなパレスチナ国家を自分たちでつくろうと、その核となる労働組合を再建するための協力を呼びかけられています。市民同士のつながりの中で、平和を実現していきたいですね。その集会に参加された寝屋川在住の方から、感想をいただきました。

モハメド・アローシュさんはパレスチナ人の平和的生存権と独立国家建設権の保障を求め非暴力の取り組みを続けるパレスチナ人民闘争戦線 (PPSF) の政治局員として、文字通り命懸けで、イスラエルの人種差別政策への抵抗の最前線に立って活動をされています。彼の在住するヨルダン川西岸地区トゥルカレムという町は 30 万人のパレスチナ人が住みイスラエル国境沿いに位置しています。分離壁が拡張されて海へ行けなくなり、農地は破壊され、大学は同朋を殺戮する基地に変えられ、登校児童は殺害され、病院は閉鎖され、救急車が走ると撃たれる、という状況が絶えません。目的の一つは最新鋭武器工場を建設することでした。

現在 200 万人のパレスチナ人が「天井のない牢獄」と呼ばれるガザ地区に封じ込められ、そこに国際法上禁止されている爆弾が (米国が 1 年間にアフガニスタン全土に投下した数を上回る規模で) 投下され、20 万人以上が亡くなっています。イスラエルはハマースとの戦闘ではなく武器を持っていないパレスチナ人を標的にした殺戮をしているのです。50 万人以上の人びとの働く権利の停止はこの問題が、ファシスト・ネタニヤフの言うような宗教問題ではなく、占領の問題であることを明白に物語っています。

当時汚職で訴えられていたファシスト・ネタニヤフは 10 月 7 日の抵抗運動を政治的に利用し、極右勢力を活用して裁判を無効化しました。ベングビールやスモトリッチが同じファシストとして政権を率い、入植者が軍に守られながらパレスチナ住民を暴行し拉致し殺害する、これがガザで行われてきた、そして、ヨルダン川西岸で現在急速に進められている実態です。

日本は米国の属国としてこれまで積極的にパレスチナ人民の迫害に協力してきました。欧米の繁栄の申し子である 80 年間に渡り不問に付されたイスラエルの犯罪に立ち向かうアローシュさんは、それにもかかわらず、80 年もの間かの戦争の (加害も遂行も) 責任を放棄してきただけのわが国日本の原爆の被害に同情を絶やさず原爆投下の犯罪に向き合おうとしています。彼の人並み外れた人間性に比しては極めて限られたものだとしても私たちにできることは、広島を繰り返さずガザを繰り返させないようにするために、10・7 以降のイスラエルの全ての戦争犯罪を白日に晒し米国のダブルスタンダード (建前として停戦、本音として占領) を暴露し、中立ではなく事実を求めることに他なりません。「力を持つ者と持たざる者の争いに背を向けるなら、それは力を持つ側に立つことになるのだ。中立な立場などありえない。」バンクシー

最後に 2 人の米国人の言葉を紹介したいと思います。2003 年イスラエル軍占領下で蹂躪されるパレスチナ人の人権を守るためガザで活動中、ラファでイスラエル軍が展開していたパレスチナ人の民家の強制撤去への抗議運動の中で運転中の武装ブルドーザーを制止せんとその前に立ちはだかり轢殺されたレイチェル・コリーさん「ガザの子どもたちも、外の世界がガザのようではないということを頭では分かっている。でも、この子どもたちがもし、実際にアメリカにやって来て、ガザとは全然別の世界があることを知ったら、そうしたらこの子どもたちは、世界を許すことができるでしょうか」。

2024 年ガザ攻撃に抗議して在米イスラエル大使館前で焼身自殺した米空軍兵アーロン・ブッシュネルさん

「私はアーロン・ブッシュネル。現役の米空軍兵士だ。自分はもうジェノサイドに加担しない。これから極端な方法で抗議をするが、パレスチナの人々が植民者によって行われていることに比べれば、たいして極端でもない。それが我々の支配階級が当たり前と決めていることなのだ。パレスチナに自由を」。